

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第134回 ●

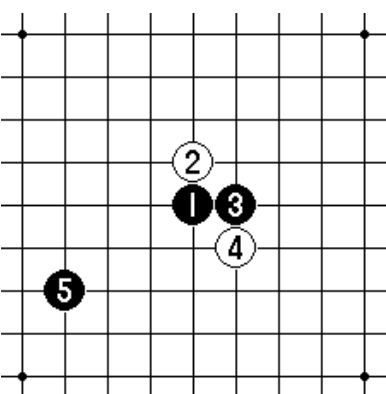
■世界戦！

今年の世界戦は稀にみる激戦だった。優勝スコアが7.5ポイントというのめかなり低い、それが4名も出たというのは記憶にない。前回は優勝の芦海は8.5ポイントだったし、その前は曹冬の9ポイントであった（ちなみに、私が優勝した95年は9ポイントだった）理由の一つには今回から五珠交替が導入されたことがあるだろう。また、これに絡むが、AIで研究していることも後押ししている。ある程度の形まで互角に行くので、満局になりやすく、勝負がつきにくいという傾向がある。

ところが、終盤に来ると星勘定がややこしく、全員

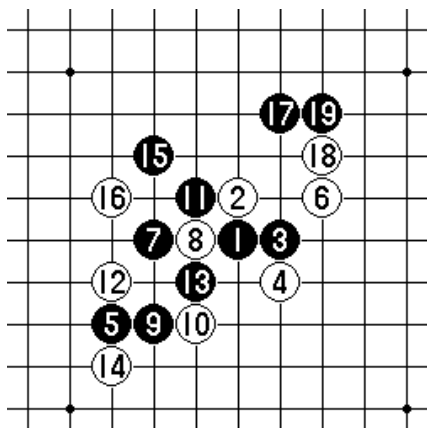
入り乱れての打ち合いとなった。これは見ていた方にとっては面白かった。今回は特に中国選手が積極的な作戦を使っていた。その中から何局か紹介しよう。

黒 梅凡 白 中山

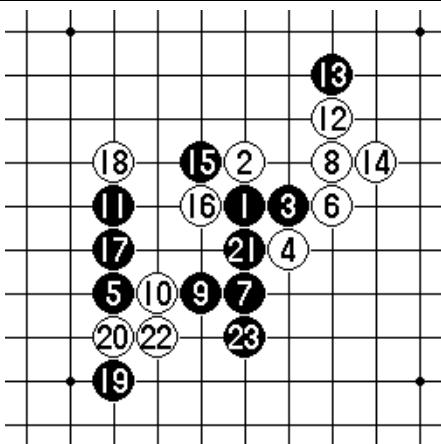


何と言つてもまずはこの黒5！だろう。ここまで離れる例はあまりない。一路右ならよくあるのだが、思わず「何？」と目を疑った。ただ、もともと白4の桂馬バサミは防ぎ重視なので、すぐに勝てることはない。打たれた中山君も戸惑ったことだろう。ここは当然相

手は研究しているだろうから、それを外す方針もあり、難しい選択を迫られた。



ところが、結果は黒19まであつてなく黒勝ちとなっている。黒7、9が素晴らしいコンビネーションで、白は10、12と防ぎに行かなければならなくなっている。こういう勝ち満足度が高い。もしメイファンが優勝していれば、本局がもっとクローズアップされたであろう。逆に、中山君としては本局の負けを引きずらなかったのが良かった。一応白は6、8が良く見

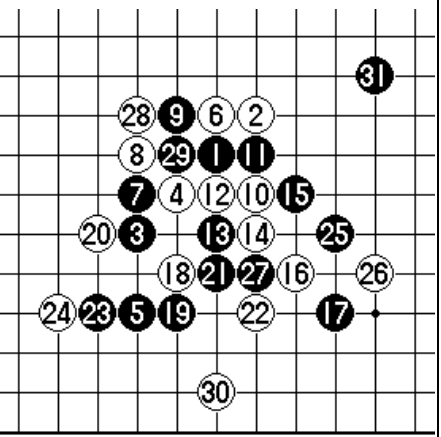


えるが、黒11まで構える手がある。もし白14と欲張れば黒15から勝ちになるため、白は防ぎに行く必要がある。

続いて梅凡が打った一手をご紹介します。

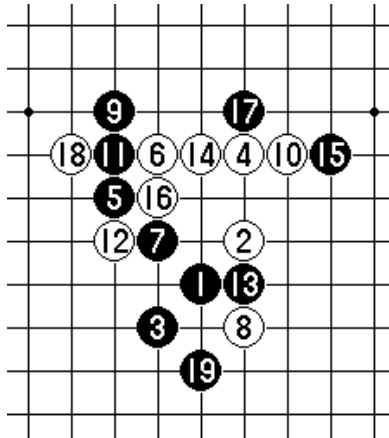
黒 梅凡 白 神谷

今回彗星、遊星はあまり打たれなかった。五珠交替になつて可能性が大きく広がったが、まだそこまでは行きていないようだ。彗星長星共通で黒5は私が名人戦2次予選でも打った手で、互角形として認識さ



れている。白18は私がその時井上君に打たれた手なのだが、神谷名人はこれを採用した。ここからの黒の打ち方がうまかった。黒21から下辺を処理した後、どこに展開すると思ったのだが、何と黒31！という手をひねり出した。しかもこの手はソフトの最善手とも一致している。こういう手はなかなか発想にない。この手で黒勝ちと言う訳ではないが、その後神谷名人が受け間違え黒勝ちとなった。梅凡はこの2局を勝って一気に上位に進出したが、

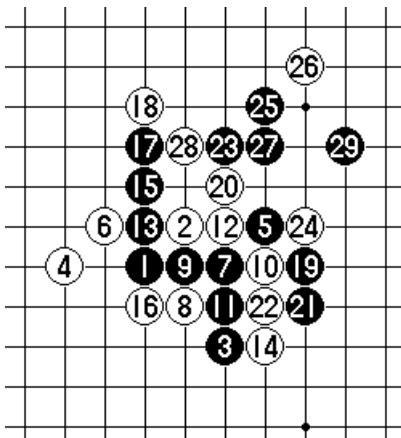
前半の負けが響いて2位止まりだった。続いては前半突っ走った倪仲星（ニーゾンキン）の手を紹介したい。白は岡部九段である。



斜月白4も見たことないが、黒5、白6の展開は目が回る。こういう手を研究されていたらもう負けたと思ってしまう。岡部君はそれでもよく耐えて頑張ったが、黒19の対応を間違えて黒勝ちとなった。それにしても、この19もソフトでは最善手で、こんなところまで事前に調べられていたとしたらとてもかなわない、

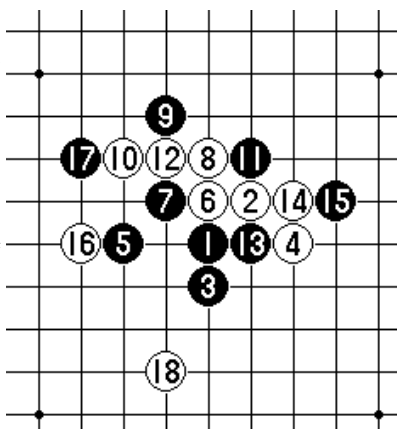
と想着してしまう。中国は今後こう言う手をどんどん開発してくるだろうから、日本も対抗策を考えていく必要がある。

次は中国同士の一戦。黒が曹冬、白が芦海である。Goはいつもいろんな作戦を披露してくれるが、この白4黒5も独創的だ。中国同士だがおそらくGo独自の作戦と想像している。



白6は当然で、その後の防ぎも特に間違っていないと思われるのだが、黒25で黒勝ちとなっている。こうなると黒5に白を取ったの

が敗着とも考えられ、恐ろしい作戦であった。最後はやはり神谷名人が執念で勝ちを出した一局を紹介したい。黒 倪仲星 白 神谷



満局でも優勝の二は当然負けな作戦を打ってくるだろうと予測し、満局に近い黒17までに白18と勝負手を放った。この手はどこも止めていないという不思議な一手である。しかし、その後の黒は手が伸びず、白が見事に打ち取った。この結果勝ち点^{7.5}で4名が並んだが、勝ちポイント差で中山君の優勝となった。